SHINCHO 45

新潮45

ISSUE 264 4 APRIL, 2004

昭和57年6月4日 第三種郵便物認可 平成16年4月1日発行 毎月1回1日発行 第23巻第4号 通巻264号

独占手記
国松長官狙撃犯と私
東大中退スナイパー
中村泰

千葉「年下の男」熱愛殺人事件
村山望

恐怖の「ストーカー事件簿」
新井省五

仮面夫婦「別れぬ理由」
袴野未矢

【強力連載陣】曽野綾子＋柳田邦男＋西原理恵子＋福田和也＋ビートたけし＋柳美里＋中村うさぎ＋大川豊＋高須克弥

「ひきこもり」を騙った「強姦魔」

「心の病」を訴えれば全てが許されるのか。「精神科」という聖域に巣食う偽装患者の実態とは。

押川剛［ジャーナリスト］

「ひきこもり」という仮面

裏切られた――。

いくらかき消そうとしても、その思いは黒々と心の内で膨らむばかりだった。

九州地方にあるZ島。私は警察署に向かうタクシーの後部座席で目を閉じ、考え続けていた。「心の病」を訴え、社会からはみ出した一人の青年が、私の著作を読んで連絡を寄越した。彼と彼の親の話を聞いて対策を練り、社会復帰の第一歩を踏み出させるために働き口を世話した。彼の周りには私が信頼する人間を配置し、バックアップ態勢は万全のはずだった。それなのに、なぜ彼は〝脱走〟したのか。なぜこのZ島に渡って万引きという犯罪行為に手を染めたのか……。

しかし警察署に到着し、そこで遭遇したある〝事実〟により、そうした疑問は一気に吹き飛んだ。疑問が解消したからではない。彼に対する怒りで、他の何事も考えられなくなってしまったのだ。

私は警察署の廊下で、二十代と思しき若い女性を見た。髪の長い、細身の美人だった。彼女は憔悴した様子で警察官に両脇を抱えられながらゆっくりと歩き、やがて私の視界から消えた。

「実は、彼には余罪の容疑があります」

部屋に入ると、担当の刑事はいきなりこう切り出した。すぐに、私の頭には、廊下で目にした女性の姿が浮かんだ。

まさか――。

私は恐る恐る訊いた。

「それは、強姦じゃないですよね……」

すると刑事は、

「女性を見られましたか？」

と逆に訊き返してきた。

私が頷くと、刑事は一つ息を吐き出してから、口を開いた。

「その女性が被害者ですよ。彼に押し倒され、腰とひじを怪我しています。先ほど、マジックミラー越しに彼の顔を確認してもらったら、〝間違いない〟とおっしゃっていました。彼にそのことを問い詰めると、〝入れてはいない〟と言い訳しましたが、彼女は〝やられた〟と言っています」

私は言葉を失った。今すぐ部屋を飛び

平成16年4月号 新潮45

出して、奴の首を締め上げてやりたい衝動を必死で抑えた。私は、奴が「ひきこもり」という仮面をつけていたに過ぎないことをその時、はっきりと悟った。

＊

私は「社会復帰サポートサービス」という仕事を、家族からの依頼を受けて行っている。精神科で入院治療を受けた後の患者や、何年にもわたってひきこもりの生活を送った当事者を、きちんと社会に適応した生活ができるように導くことが目的で、個々のケースに合わせたプログラムを作成し、実践している。

しかし斉藤正人（24・仮名）のケースは、当初から特異だった。斉藤は自ら私の事務所に電話をかけ、その日のうちに自分の病歴やプロフィールをメールで送ってきた。通常は本人よりも親が積極的であるため、いささか不可解に感じられたのだ。

私の事務所には普段から、様々な相談や依頼が寄せられるが、最近目に見えて増えているのが「偽装患者」である。薬物入手などの目的だけのために、「精神科」という一種の「聖域」をうまく利用して病を偽るのだ。斉藤もそうした「偽装患者」なのではないかという疑いを私は最初から抱いていたが、まさか「犯罪者」だとは思いもしなかった——。

対人恐怖と自殺願望

斉藤が母親を伴って私の事務所を訪れたのは、昨年七月末のことだった。

その際彼は虚ろな表情で顔色も悪く、十分過ぎるほどの「病人らしさ」を漂わせていた。しかし身なりは渋谷の若者たちと何ら変わらず、七分丈のズボンに、オレンジ色のオープンシャツという格好だった。流行の坊主頭も良く似合い、年齢とアンバランスな点は一つもない。それよりも、身なりと「病人らしさ」のアンバランスの方が、私には気になった。

私は、斉藤本人と母親から、彼の経歴を詳しく聞きだした。

斉藤の両親は彼が小学校四年生の時に離婚している。そして斉藤が中学校へ入学すると同時に母親は再婚し、それまで住んでいた関西から関東へと転居することになった。中学時代の斉藤は、関西弁をしゃべることもあって人気者だったという。しかし恋人に振られたことで自信をなくし、周囲から疎外されているようにも感じ始めた。中学卒業後、高校一年生の十一月から不登校になり、まもなく中退。その頃から対人恐怖と自殺願望が強くなり、本人の言によれば、「ひきこもりのような生活を送り」、東京都内にある「ひきこもり」が集まるサークルにも属しているということだった。

やがて斉藤は自らの意志で精神科への通院も始めた。その後は母親と共に、著名な精神科医やカウンセラーを次々に訪ねては受診を繰り返すという、いわゆる「ドクターショッピング」の日々を送るようになった。

母親は、本人の自立と気分転換を兼ねて、斉藤が二十歳の時にワンルームマンションを借りた。そして毎月二十万円を仕送りして、一人暮らしをさせたのである。このような生活は三年ほど続いたが、結局、斉藤は実家に呼び戻された。その後、私に連絡してきたのだ。

私はとりあえず一ヶ月間、本人と両親との面談を何度か繰り返させてほしいと伝えた。親子は意外そうな顔をしたものの、それを承諾した。事務所の玄関まで見送った私に対し、母親は深々と頭を下げた。しかし六十歳を過ぎた母親の、床まで付きそうなプリーツスカートと、身体にフィットした花柄模様のTシャツは、不思議な違和感を抱かせた。

精神科医は斉藤を「患者」として扱い、薬も処方していたが、私にはどうしても彼が対人恐怖や自殺願望に悩む「ひきこもり」の患者には思えなかった。第一、斉藤は外出もできるのだ。

昨年の本誌十二月号にも書いたが、精神科医に「不眠」と「対人恐怖」と「自殺願望」を訴えれば、必ず向精神薬を処方してもらえるという事実もある。

斉藤はレキソタン（抗不安薬）を好んで常用していた。

レキソタンは常用者の間で依存性の強い薬として知られているため、斉藤が向精神薬依存の偽装患者（詐病）という可能性も考えられた。

両親のセックス

私は事務所スタッフの力も借りて、斉藤の私生活を少しずつ探った。そしてその結果、斉藤は、酒も飲めば、風俗店にも通い、彼女もいるということが分かった。斉藤の実態は、到底「ひきこもり」などと呼べるモノではなかった。

彼は、自分の感情をオーバーに表現するという癖を持っていた。恥ずかしい時は顔を手で覆い隠し、そのままソファーに横向きに倒れ込んで見せたり、ビックリした時には両手を挙げてのけぞったり、喜怒哀楽を常に大げさに表現するのだ。そんなオーバーリアクションを斉藤の幼児性だと捉えることもできるだろうが、私には躾の問題だと思われた。

斉藤の「病歴」の背景には、母親との確執があることも否めない。斉藤は、両親が離婚した理由を「父親が仕事をしなかったから」と話したが、今でも、その理由が許せないようだった。斉藤が親のすねを囓り、仕事に就かずに精神病を装って生活していく姿は、親への復讐にも思えた。斉藤はある時、私にこんなことを訊いてきた。

「うちの母親は離婚する間際まで、父親とセックスしてたんですよ。それって変ですよね？」

「お前のお袋は……母親というよりも……女なんやの」

私は辛うじてそう答えたが、初めて聞く〝事実〟にショックを受けた。

斉藤の話によると、毎夜、母親が行為の最中にあげる「声」があまりにうるさく、眠れない日々が続いていたとのことだった。そこで、気付かれぬようにそっと両親の性行為を盗み見ていたのだという。

私は斉藤の義父とも会った。義父と話して分かったのは、斉藤に関しては全て母親が主導権を握ってきたということだ。何かにつけて「専門家がこうしなさいと言ってるんだから」と義父を諭し、積極的な関与をさせないようにしていたのである。

「親としてできることは何でもやります。正人を助けてやってください」

私は義父のこの言葉に気圧され、依頼を受ける覚悟を決めた。「社会復帰サポートサービス」の契約を結んだのは、八月末だった。

私は斉藤の社会復帰の舞台として、九州にある理容店を選んだ。ここは、高校時代からの親友である小山（仮名）という男が営む店である。斉藤の実父が洋裁職人だったことや、斉藤自身が職人の道を希望したことも、理容店を選択した理由の一つだった。

小山とは密に連絡を取り合って相談を重ねながら、一年間の見習研修期間を織り込んだ社会復帰プログラムを作成した。店のスタッフにも協力を仰ぎ、しっかりした受け入れ態勢を作ってもらった。月に一度は私が店を訪れ、斉藤の指導、教育のサポートに当たり、斉藤の入店や入寮に関しては、私が保証人になることにした。しかし、社会復帰プログラムはすぐに暗転してしまった。

突然の脱走

「斉藤が脱走したっ！」

小山から連絡が入ったのは、斉藤が入店してから二週間後の早朝だった。

寮に同居していた前田（仮名）というスタッフが眼を覚ますと、本人の姿が見当たらず、ベランダにあった洗濯物やボストンバッグがなくなっていることにも気づいたと言う。前日は普段通り何の問題もなく仕事を終えて、夜は前田と一緒にゲームをやった後、深夜一時過ぎには自分の部屋に戻ったとのことだった。

小山の声にはいつもの冷静さがなく、万一のことも心配している様子だった。「とにかく本人の帰りを待つしかない」と私は諭した。

失踪から二十日後、両親が突然私の事務所を訪れた。驚いたのは、義父の顔が腫れ上がり、無数の傷を負っていたことだった。斉藤の失踪後、母親が父親に当たり散らし、殴る蹴るを繰り返したということだった。母親の言い分は、「主人が依頼しなければ、正人はいなくならなかった」というものだったが、私には本末転倒にしか聞こえなかった。

母親が、「正人は、どこかでご飯も食べずに飢え死にしているか、首でも吊って死んでいるかもしれない」と泣き叫び、ソファーの上から大きく崩れ落ちた時には、さすがに目を疑ってしまった。その姿は以前、斉藤が見せたオーバーリアクションとも重なり、はっきりと母子が一対であることを証明していた。

この日は母親に押し切られる格好になり、斉藤が連絡を取りそうな友人知人などを私が訪ねることと、一週間経っても消息がつかめない場合には、警察へ失踪届を出すということで落ち着いた。

翌日私は、斉藤と以前交際していたという谷村洋子（仮名）に電話をかけた。彼女は私に会うことを快諾してくれた。

谷村は都内の有名大学に通う、とても利発そうな女性だった。斉藤とは、「みんなで初日の出を見よう」という、ひきこもりの当事者を集めたイベントに彼女がボランティアとして参加した時に初めて会い、その後交際するようになったという。

「そんなイベントに参加できるくらいならひきこもりとは言えないのでは」

と尋ねると、元ひきこもりやひきこもりがちの人間も参加するのだと教えてくれた。

彼女の話では、斉藤は常々、「自分は母親への憎しみをバネにして生きている。親が甘えさせてくれるのだから、別に働かなくてもいいじゃないか」「自分は精神病じゃない」などと話していたらしい。

彼女は仲の良かった仲間達に連絡を取って、斉藤から連絡が入ったら、すぐに協力してくれるように呼びかけてくれた。

「斉藤君は大丈夫ですよ。みんな口を揃えて、『あいつはしたたかな奴だから、ひとのモノを盗んででも、生きていける。外国にでも行ってるんじゃないか』と言ってます。私もそう思います。心配することはないと思いますよ」

そう話す彼女に向かって私は尋ねた。

「あなたは何故、そんな斉藤と付き合っていたの？」

「私にはできませんでしたが……彼を立ち直らせたかったんだと思います……」

彼女はこう言い残して立ち去った。

家族や周りの人間には、患者やひきこもりを装い騙していた斉藤だったが、彼女にだけは真実の姿を見せていた。そうすることで逆に信用させて、彼女をもてあそんだのではないか、と私は思った。

犯罪者の輪郭

「斉藤の行方が分かったそうです！」

谷村に会った日の午後十時過ぎ、事務所のスタッフから連絡が入った。

この日の昼に、九州地方にあるZ島の役所から、母親の携帯に留守電が入っていたらしい。母親から聞いた話を整理すると、以下のような流れだったようだ。

その日の朝、斉藤はZ島の役所の福祉課を訪れ、「二週間野宿した。お金を使い果たしてしまった。食事もとっていない」と泣きついた。職員は支給限度額の一万円を本人に渡し、「このお金で船に乗って、本土に行きなさい」と言ったが、斉藤の様子が気にかかり、港まで様子を見に行った。そこで本人がチケットを持っていることを確認したため、実家に所在を連絡してきたのだった。

斉藤がZ島にいたことは全く意外だったが、福祉課を訪ねて金を引き出すという「したたかさ」は、谷村や仲間達が言った通りで、妙に納得させられた。

私はすぐに小山と連絡をとり、翌朝の飛行機で九州へ飛び、斉藤と会った。

車の中で斉藤は当初、私には見向きもせず、ふてぶてしい顔で腕組みをして座っていた。

「貴様、何か犯罪を犯してきとるんじゃねぇだろうなぁっ！」

私が叫ぶと、斉藤は態度を豹変させた。

「万引きはしましたが、それ以外は何もやってません。本当です。ご迷惑をおかけしまして、本当に申し訳ありませんでした。許してください」

私は、斉藤が他にも罪を犯していないかということを何度も問いつめた。斉藤はドラッグストアでの万引きの他に、閉店していた店に不法侵入したことを告白したが、それ以外の犯罪行為は一切ないと言い切った。食べ物のほとんどは万引

きで調達したようだった。

役所の福祉課に行った際には、

「自分は入通院歴があって、九年間ひきこもりのような生活をしている。こんな自分を見て、今度は母親の方も精神病になった。自分はそれに堪えきれなくなって、Z島まで逃げ出してきた」

と嘘をついて、金を引き出し受診にこぎつけたと語った。おそらく母親譲りのオーバーリアクションで言い含めたのだろう。

逮捕

数日後、私は斉藤を連れて、Z島に向かった。小山とも話し合った結果、とにかく被害を与えた店に謝罪をすべきだということになり、保証人である私も同席することにしたのだ。

最初に訪れたのは斉藤が万引きを働いたドラッグストアである。斉藤は店長に土下座し、私も一緒に頭を下げた。

不法侵入を犯した店では、事情を話すと、店主の奥さんがギョッとした顔で、「あんただったの……」と、斉藤の顔を覗き込んだ。

「警察の鑑識係が指紋を採取して、遺留品のボストンバッグも持って行きました。今の時点でうちに謝罪されても困ります。警察の方に行ってください……」

斉藤はすぐさま土下座をして地面に額を擦りつけ、涙を流しながら「ごめんなさい」を連呼した。さすがに店の夫婦も、急に気の毒そうな表情に変わった。

しかし私はその姿に、腸(はらわた)が煮えくり返った。これまで嫌というほど見せつけられた、親子一対の感情表現。必死になって謝罪する斉藤の姿は、決して自戒からではなく、単に自分が助かりたいだけなのだ。自分の要求や欲求を相手に飲ませるためのパフォーマンス。今までどれほどたくさんの人達が、この姿に騙され、手ごずらされてきたのか。

「斉藤っ！　警察署に行くぞっ！」

そう怒鳴ると、斉藤は無言のままタクシーに乗り込んだ。私とは眼も合わせず、黙ったままだった。

「他には何もやっていないですよね」

警察官の質問に対し、斉藤は「やってません」と答えた。遠方から謝罪に来たということを考慮して、身柄の拘束はせずに、夕方の便には間に合うよう、手続きを済ましてくれるという。

それを聞いて斉藤の緊張も和らいだようで、「すいませんでした」と頭を下げて、手続きのため別室に移動していった。

しかし、「他に何も犯罪を犯していない」という斉藤の弁明は、すぐに覆されることになった。

斉藤が手続きをしている間を利用して、私は未払いになっている診療費を精算しようと思い、タクシーで病院へ向かっていた。その車中で、携帯が鳴った。

「お戻りは明日にしてもらいたい。とりあえず署に戻ってもらえますか。その時に理由をお話しますから……」

署の生活安全課の職員からだった。

そして急いで署に引き返し、そこで私は斉藤に強姦の容疑があることを知ったのだ。その他にも強盗（ひったくりによる金品強奪）の容疑もかけられているようで、犯行の手口も、初犯とは思えない

ということだった。私も容疑者出頭に際しての参考人として、調書を取られた。

午前零時十分、斉藤は逮捕された。

免罪符

「懲役一年二ヶ月、執行猶予三年」

昨年の十二月下旬、斉藤は裁判所で「犯罪者」の烙印を押された。しかしその判決は、実際に斉藤の犯した罪の一部に対してのものでしかない。強姦罪等は親告罪（被害者の告訴・請求を公訴の条件とする犯罪）だが、被害者の女性が被害届を取り下げたために、罪に問われなかったのだ。斉藤に「受診歴」があったために、警察が腰の引けた捜査をしたのは明らかだった。

「うちの母親は離婚する間際まで、父親とセックスしていたんですよ」

斉藤に「犯罪者」としての人生を歩ませた原点は、この言葉にあると私は考えている。

昼間は、「金」を稼がない夫を子供の目の前でヒステリックに罵倒し、「離婚する」と叫んでいた母親が、夜になれば、その夫と情事に耽って官能の叫び声を上げ、自分の「性」の欲求を満たしていた。斉藤が母親の離婚理由に納得できなかったのは、この「嘘」が原因だった。

「父親が仕事をしないから」という離婚の理由には、半分の真実と半分の嘘が含まれている。このようなコミュニケーションの手法を、斉藤は母親の姿から学び取ったのだ。そして半分の嘘がばれないようにするために、大げさなパフォーマンスも身につけ、次々に欲求を満たしていったというわけである。

このような生き方をするために、斉藤が精神科医療やひきこもりといった聖域を手放さなかったのは頷けてしまう。それは「社会復帰サポートサービス」についても、同じことが言える。これほど便利な「免罪符」はないからだ。

しかし、まっとうな社会人として導こうとした私たちの「社会復帰プログラム」は、斉藤にとって大きな誤算だった。だから、二週間で脱走したのだ。

斉藤はよく、「社長の会社は、警備業の許認可を警察からもらっているから、安心ですよね」と語っていた。当初は意味がわからなかったが、私たちを警察からの隠れ蓑にしたかったのだろう。

初めて斉藤と食事をして以来、彼の言動を見て、私は度々次のような言葉を発していた。

「嘘ばっかりつきよったら、お前いつか警察に突き出すぞ」

その時点では、斉藤の「本当の姿」など知る由もなく、偶然に発した言葉だったが、彼にしてみれば、大きな驚きと恐怖を感じていたに違いない。

斉藤は、精神科に通う患者の仮面を被り、また同時にひきこもりの仮面も被りながら、犯罪に走った。「精神科」と「ひきこもり」が、斉藤のように、ルールなき欲求を満たす若者にとっては避難所になっているのだ。そして現在、この二つの聖域は若者達の間で、新興宗教のような広がりを見せている。

（おしかわ　たけし）

*プライバシーおよび人権保護の立場から、人物が特定できる情報については配慮してあります。